

文芸研ニュース

2019年8月3日

—NO. 151—

発行 文芸教育研究協議会

編集 文芸研事務局

目次

巻頭 上西委員長より・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
サークル再開、そして鹿児島大会

(唐津サークル・永渕先生)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

文芸研ニュース一五〇号記念(山中吾郎先生)・・・・・・・・・・・・・ 7

青年学校便り(委員長・酒井先生)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

西郷先生待つ牛窓へ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

事務局通信・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12



西郷邸へ 4月29日

文芸教育の継承・発展の

かごしま大会に

上西信夫 (文芸教育研究協議会委員長)

1. 文芸教育の継承・発展のかごしま大会に

今年も六月一二日がめぐってきました。西郷竹彦先生の逝去から三年が経ちます。八月四・五日の二日間、西郷先生の故郷・鹿児島で第五十四回文芸教育全国大会を開催します。鹿児島での大会は、一九七五年第一〇回大会(鹿児島市)大会テーマ「ひきだす授業・せりあがる授業」《とおしよみ》より《まとめよみ》へ、一九七八年第一三回大会(名瀬市)「国語」教育の未来像―現状の批判とあるべき姿、一九九九年第三四回大会(鹿児島市)「真の学力を育てる授業の創造」、二〇〇九年第四四回大会(鹿児島市)「虚構の方法を学ぶ」に続き五度に及びます。

現地鹿児島サークルは、噴煙にも、豪雨にも負けず、県下三カ所でプレ集会を開いたり、地元テレビ局の後援を取りつけたり、あらゆるつながりを駆使して参加を呼びかけ、大会成功のために日夜奮闘しています。第一次締め切りが終わりましたが、目標の三五〇名にはまだ届いていません。全サークルの現地と呼応した

更なる奮起をお願いします。

このニュースが発行される頃には参院選も終わり、改憲勢力が三分の二ラインを超え、国会での発議を許すかどうかの局面です。二〇二〇年に憲法「改正」を明言する安倍政権のもと、戦後最大の憲法の危機という情勢下の大会です。それと連動して国語教育にとっても大きな転換点になるかもしれない年でもあります。

安倍政権に批判的な立場の記者やコメンテーターのTVからの露骨なパージが目につきますが、ゲストの木村草太さんの講演は、憲法問題の本質を示し、私たちに勇気と展望を与えるものになると期待しています。また、以前から全国大会講師にと要望の強かった内田麟太郎さんの講演も大いに楽しみます。

文芸研運動の展開の成果として、説明文指導では《説得の論法》と同義の「筆者の工夫」「説得の工夫」を課題としてあげる教科書が多くなりました。現行教科書の《語り手》（光村図書三年「モチモチの木」）の登場に続き、二〇二〇年度から使用の小学校新教科書では、《視点》の用語が「学習のてびき」に登場します。（光村図書六年「帰り道」森絵都）ようやく視点論が小学校国語教育の場で認知されるようになりました。そして、文芸研が四〇年来国語科を貫く認識方法（《ものの見方・考え方》）を教科内容として関連・系統指導の研究を重ねてきましたが、国語の教科内容を追究する先進的な取り組みをしている研究者

や現場によって《認識方法》が注目されるようになりました。

第五四回文芸研がごしま大会の研究テーマは、「《ものの見方・考え方》を育てる国語教育―美と真実を求めて―」です。文芸教育は、視点論に基づいた切実な共同体験（美的体験）をベースとして、人格形成の根幹をなす（ことば・表現の力）（人間認識）を育てることを担っています。さらに教育活動の総和のなかで、変革主体を育てる人間教育に関わる学力―《ものの見方・考え方》を教科内容として獲得させる国語科教育を構想します。西郷文芸学理論と教育的認識論を関連・系統的に身につけさせることなしに「主体的・対話的で深い学び」も成立しないと考えます。西郷先生が《関係認識・変革の教育》論を掲げてから六〇年。文芸研が四〇年前に「国語科教育の未来像」（一九七八年奄美大会）・「国語科教育の全体像」（一九七九年輪島大会）を世に問うてから、《視点》論・《ものの見方・考え方》の重要さがや々と認知される時代がやってきました。時代が半世紀かけて西郷理論に迫ってきてきたのです。西郷会長の豊かな文芸学理論・教育的認識論・文芸教育論のバトンを受け継ぐこの時代のランナーとして鹿児島大会を大きく成功させたいと思います。

2. 膨張する「スタンダード」

「O小AKY運動」(あたり前にやるべきことをきっちりやる)―二〇一〇年、私が退職して再任用で赴任した学校の校長は、「荒れ」た学校だったからでしようか人気歌手グループAKBをもじって「AKY運動」と称した生徒指導に力を入れていました。その後、あいさつの形式、鉛筆の本数、机上の教科書やノート、筆箱の置く位置、ノートの取り方、休み時間の過ごし方、給食の配膳の順序や食べ方、掃除のやり方(給食・掃除は私語の禁止)、ロッカーや物掛けの使い方……と、学校生活のあらゆる場面に「スタンダード」を設定している学校が広がりました。新たな管理主義教育といえるでしょう。

迂闊にも現役時代は「スタンダード」という用語は馴染みがなく過ごしてきましたが、中学校では「規範意識の醸成をめざして」ゼロ・トレランス的生徒指導と一体となって二〇〇五年ごろから広がっていたということでした。照本によると*1その後「スタンダード」に新しい要素が追加され、「学びのユニバーサルデザイン」等と称される、「すべての子がわかる・できる授業」を達成するために、机・椅子の配置や掲示物等の教室環境、板書の仕方、ノートのとらせ方、発表や発問の形式……といった授業運営にかかわる指導全般を細部にわたって全校で統一するような動きが広がっていったと指摘しています。「すべての子がわかる・できる授業」と言えば聞こえはよいが、実のところは「全国一斉学力テスト」対策にほかならない。

学テの結果に対する学校や自治体当局の過剰な意識が、いたずらに授業の形式や内容を揃えさせようとする動機になっていると喝破しています。

「スタンダード」は生徒指導と授業を軸に学校教育活動全般に拡張され、その効力は子どもだけではなく教師の指導全般に及ぶものになってきました。「当たり前のこと!」「子どもたちのため!」といったかけ声がやみくもに発せられているような職場や「チーム学校」体制が浸透している学校では、異論はおろか疑問を出すことにも相当な勇気がいることは容易に想像できます。

照本は、「スタンダード」と新自由主義の親密性についても鋭い分析を展開しています。「スタンダード」が猛威をふるい、膨張を続ける背後にあるものは新自由主義の統治手法―見栄え・効率・可視化・説明責任といった新自由主義が好む要素と親和的であるだけに、学校経営の表看板としても申し分ないと言い、「学力向上」「ゼロ・トレランス」「保護者・地域との協働」…をカバーした学校経営のパッケージがつけられます。PDCAサイクル*2に熱中したり、雑多な指標が幅を利かせていたりする学校経営が横行しています。

見栄えと効率を最優先する新自由主義の統治手法は、日々の教育活動を可視化できるものだけに矮小化し、数値測定になじまないものは成果と認めません。その一つであるPISAは教育の計測できる狭い面

を強調することによって、身体的・道徳的・市民的・芸術的な発達といった計測し得ない、あるいは計測の難しい教育対象に関心を向けません。これがPISA型読解力の限界であり、人文科学や芸術領域の教育軽視の文脈と重なります。

新自由主義の教育統治としての「スタンダード」問題の根源は人間観の貧困だと、照本は言います。教育という営みを成立させる不可侵の前提は、個別具体的存在としての子どもと教師の承認です。だれとも交換不能である子どもと教師が、日々の対話と応答をおおして紡ぎだしていくのが教育です。新自由主義の統治政策はこれを否定します。それが関心を示すのは人格をもつ人間の教育ではなく、数値交換可能な「資質・能力」で表示される「人材」の調達です。すでに学校は「資質・能力」を指標とした「人材」調達の作業場となりつつあります。

「スタンダード」が、「当たり前前のことを！」「子どものため！」のかけ声のもとで人間存在の多様性を否定し、それから外れることを断罪するものである以上、その拘束性を最大限に強めようとすれば、より可視化（見える化）しやすい数値管理の採用へと傾いていきます。すでに、子どもも管理職を含む教師も、雑多な数値結果に一喜一憂する光景が日常のものとなりつつあります。人間を育む営みに冷たい数値目標追求方式はなじみません。「スタンダード」に抗するとは、「人材」調達の作業場・調教場と化した学校を教

育が行われる場へと再生していくことにほかありません。子どもと教師が教育実践の主体として出会い、日々の対話や応答をとおして共に成長していく場合へと、学校を魅みがえらすことにほかありません。（子どもと教師が教育実践の主体として出会い、日々の対話や応答をとおして共に成長していく場合へと、学校を魅みがえらす）実践は、あの天皇絶対主義時代に明星学園をはじめ大正自由主義教育・新教育運動の展開として歴史に刻まれていきます。「十人十色の読み」、子どもたちの様々な意味づけ・解釈を認め、それらを重ね合わせ、せり上げていくことが文芸教育の出発点です。多様性の保障と妥当性の追求を、文芸教育の場でこそ追求していきたいと思えます。教育の場に人間らしい息吹を吹き込みましょう。

3. 高校学習指導要領改訂・大学入試改革

小中学校の国語科の教科内容の変更が、全国一斉学力テストの出題問題を梃子に強行され、非連続型テキストの「読解」「表現」として「読まない文芸・説明文教育」「書かない作文教育」の方向に授業が明らかに誘導されています。そこには、戦後日本の教師たちが理論的実践的に創造してきた現実認識を育て、人間的発達と密接にかかわるところの文芸教育・作文教育を含む国語教育全体を貫く背景をも取り去ろうとしていることが明らかになりました。今春の十二回目の学

テ・小学校国語では、前回までA問題の中に不完全な形でもかろうじてあった物語や説明文の読解問題がついに姿を消しました。問題の意図を素早く読み取り、一つのことにと拘泥せず、場面に応じて巧みに切り替えるような能力（操作・適応型言語能力・実用国語）を国語力とみなす風潮がますます強まっています。

先号に高校国語の問題点を四点に整理しました（①実社会・実用性の過度の強調 ②教育課程編成の困難さ ③「ことば」の芸術性の軽視 ④個人の発達を期する教育から「我が国の言語文化の担い手」を育成する国語教育へ）。

学テを通しての教科内容の変更と同じ手法で、大学入試改革と併せて高校国語の教科内容・教科構造が強引に変えられようとしています。紅野*3は共通テスト国語・記述式のサンプル問題の公表は、受験生のみならず「今後の教育はこのようなものになるという暗黙のメッセージ」を高校の教師、塾や予備校、教科書・参考書発行出版社にも示すためのものであるといえます。大学入試の方法と形式の変更はそれだけにとどまらず、日本の高等学校における教育をこう変えたいという文科省の意図が込められているというのです——入試を変えないと高校の教育改革が進まない。高校の教育改革がうまくいかないと大学の教育がうまくいかない。大学の教育改革がうまく行かないと、日本の政治・経済・社会をリードする指導者や担い手が育たない——と。

入試改革——記述式を含めた共通テストで問うのは学力ではなく「資質・能力」だという思想にも注意が必要だと紅野は警鐘を鳴らします。マークシートでは人間の一部の力しか測れない。記述式を含めた共通テストに改めることによって、人間の全人格的な「資質・能力」を測るのだという傲慢な考え方が——人間のすべての「資質」や「能力」を掌握し、点数化・序列化しようとする思想・人間観に私たちは対面しているのです。

文芸教育は文芸作品の描いている人間の真実を美として体験することから、《典型をめざす》主体的な読みによって子どもたちの思想を耕すことが第一義のものとなります。さらに芸術家として作家が《虚構の方法》によって、より深い意味づけを作品に与えているかを学ばせたいと考えます。「読みとる」（読解）ことに終始する読解主義や子どもを遊ばせる活動主義、操作・実用主義国語を乗り越え、生きてはたらく力——《典型をめざす読み》と《虚構の方法》を学ぶ国語の授業が真の主体的な読みといえるでしょう。

視点をふまえた切実な共同体験（《たしかめよみ》）をくぐった後の《典型をめざす読み》こそ、本来の意味の活用力・探求力です。また、国語の授業で身につけた《虚構の方法》、《ものの見方・考え方（認識の方法）》を駆使して、歴史の主体者として世界を読み解き、意味・価値の発見と創造に向かう力を育てる国語教育こ

そめざすべきです。「スタンダード」と「実用国語」を乗り越えて、教育実践に自主性・柔軟性・創造性・専門職性のうねりを巻き起こしましょう。

【註】

- *1 『クレスコ』二〇八号「膨張する『スタンダード』、その行き着く先は？」照本祥敬（てるもとひろたか・中京大学国際教養学部教授／専門は生活指導論／二〇一八 全日本教職員組合・大月書店）
- *2 P D C A サイクル P l a n（計画）↓ D o（実行）↓ C h e c k（評価）↓ A c t（改善）↓ P ↓ D ↓ C ↓ A：生産技術における品質管理など継続的改善方法。
- *3 『国語教育の危機―大学入試共通テストと新学習指導要領』紅野謙介（こうのけんすけ）／日本大学文学部教授・日本近代文学研究／ちくま新書二〇一八）／『現代思想』「『国語』改革における多様性の排除」紅野謙介 二〇一九年五号）

サークル再開、そして鹿児島大会

唐津サークル 永渕和彦

文芸研「会員名簿」末尾の「活動休止・困難サークル」欄に長らく名を連ねていた唐津サークルでしたが、今年四月、十数年ぶりにサークル活動を再開しました。再開のきっかけは、一月に唐津で開催された「国語教室」でした。講師に野澤副会長を招いてこの学習会を中心になって準備・運営されたのは、文芸研と関わってまだ日の浅い二十代の川口芹奈先生でした。どれだけの人が集まるのか不安な中、三十名弱の参加者を得ました。私自身、文芸研から十数年離れた状態でしたが、若い先生達のエネルギーにふれ、もう一度勉強をやり直す機会を与えてもらったと思っていいます。この学習会で「再会」した、私を含めた元会員（中島陽子先生、中野周一郎先生）の三名と川口先生の四名でサークルを再結成しました。直接のきっかけはこの「国語教室」だったものの、サークルを再開できたのは、お二人の「ベテラン」先生の地道な教育実践によるところが大きいと思います。若い川口先生が文芸研と出会うことになったのは、中島先生と同じ学校で同学年となり、その授業実践に感銘を受けたからだと思います。また中島先生は組合支部主催の「イチオシ講座」で詩の模擬授業を定期的に行うなど、文芸研の

理論と実践を広めてこられました。中野先生も、文芸研の理論をもとに学級経営や授業実践・教育実践を精力的に進められています。「少数精鋭」とはいきませんが、隣の福岡サークルにも学び、毎月定例会を行い、教材分析や授業案の検討等に取り組んでいます。

今、唐津市の学校では「アクションプラン」の名で、一つの流れに当てはめた授業の「型」が提示され、自己評価が義務づけられる等、半ば強制されている状況です。それを「おかしい」と感じている教員は多いようですが、日々の多忙さの中で流されているのが現状です。そうした中で、私たちはただ批判するばかりでなく、それに代わる授業実践、それを乗り越えていく授業実践を目指していかなければならないことを痛感しています。

この夏の鹿児島大会は、唐津サークルを再開して迎える初めての全国大会です。それぞれの地域の困難さに直面しながらも、教材研究・授業実践に奮闘されている他サークルの仲間に学び、もう一度「子ども達の『ものの見方・考え方』を育てる」という原点に立ち戻ってサークル活動を進めていく契機にしていきたいと考えています。

『文芸研ニュース』は私たちの財産

—— 150号記念に寄せて

山中吾郎（東京文芸研）

『文芸研ニュース』150号を記念して原稿を寄せてほしいとの依頼を受け、私が編集を担当した第108号（2005年8月刊）から第127号（2011年12月刊）をすべて読み直してみました。当時のことがいろいろと思い出されました。

○編集の仕事はやり甲斐があった

野澤正美さんから引き継いだニュース編集の仕事でしたが、なかなかやり甲斐がありました。毎号12ページの内容を計画して原稿依頼をします。執筆者はできるだけ多様な方がいいので、誰にお願いするかが大事です。集まった原稿を紙面にびったり収めるのも、意外と骨が折れます。何とか完成させたときの達成感は格別でした。

西郷会長は巻頭言の原稿を手書きで作成して郵送（時にはFAX）してくださっていました。ご存じの方も多いと思いますが、西郷会長の書かれる字は達筆すぎて、素人が判読するのは容易ではありません。暗号

を解読するような気分でした。また、引用の出典を明示されていないことが多かったので、それは編集者たる私の仕事と心得、必ず原典に当たるようにしていました。会長は思考の趣くまま超人的なスピードで原稿を執筆されるので、時には文章がねじれていたり、意味の通らない表現になっていたりすることもありました。そんな時は、会長の文体を崩さないように私が書き直したり、書き加えたりしていました（もちろん事後承諾はいただいていた）。慣れてくると、会長の文体を再現できるぐらいになり、「西郷竹彦のゴーストライターになれるかもしれない」と密かに思ったものです。

○文芸研の歴史を記録する仕事だった

私が担当した期間には、文芸研の歴史に残る様々な取り組みがありました。

しばらく休刊していた『文芸教育』誌が2006年5月に新読書社から復刊しました。高い水準の理論研究誌として再出発する旨が西郷会長の巻頭言に力強く記されています。その他にも、教育基本法の改悪とそれに対する廃案要求声明（2006）、西郷会長米寿記念誌の作成（2007）、学習指導要領改訂についての学習会開催（2008）、初めての全国大会ブロック開催（2010）など、すべての出来事が『文芸研ニュース』に記録されています。

なかでも私にとって印象深いのは第125号（2011年5月刊）です。3月の東日本大震災について巻頭言で触れられているほか、文芸研の仲間の動向と支援について藤井和寿さんが4ページにわたって報告しています。開催自体が危ぶまれた第46回青森大会を、現地東北ブロックの尽力と全国の会員の連帯によってやり遂げた意義深い事実が、第126号、第127号と合わせて読むことで紙面から伝わってきます。

○仲間の協力あってこそ

『文芸研ニュース』だった

毎号の最終ページは必ず次のように締めくくりました。――『文芸研ニュース』は主に会員の投稿をもとに編集されています。原稿の執筆にご協力をお願いします。

実に多くの方に原稿の依頼をしました。私は「編集」の仕事をしただけで、実際の『ニュース』の「作者」は全国の文芸研会員のみなさんでした。また、多くの方が「読者」となってくださるなければ『ニュース』を発行する意味もなかったのだと思います。「今回の『ニュース』よかったよ」の一言がどれだけ励みになったことか。

現在は、松山幸路さんが編集を担当してくれています。文芸研のみなさん、松山さんからの原稿依頼があ

つたら、ぜひ快く引き受けてください。そして『文芸研ニュース』が手元に届いたら、端から端まで読んでください。『文芸研ニュース』は私たちみんなの財産です。次は200号をめざしましょう。

青年学校を終えて

16期青年学校委員長 酒井 大輔

多くの先生方との繋がりができ、その考えを学べた。これが私にとって16期青年学校で得た一番の収穫でした。青年学校では上西先生、野澤先生をはじめ、たくさんの方々の実践や考え方、生き方なども学ぶことができました。超一流の先生方の実践や考え方、生き方なども学ぶことができ、自分自身の視野も広がりました。単に国語の授業で子供たちにどう教えるか、何を学ばせるかだけにとどまらず、目の前の子供たちは、どう考え、なにに困っているのか、世の中のものごとをどう見ていけば良いのか、どう考えていけば良いのか……。それらを見やすく、考えやすくしてくれる考え方を、青年学校で多くの先生方から学びました。そしてその根幹にある考え方が、文芸研の「ものの見方・考え方」なのだと思います。

普段の生活の場面でも、対比・類比して考えたり、条件的に考えたりするようになりました。そう考えると物事が

とても分かりやすく、考えやすくなりました。だから子供たちにも自信をもって教えられるようになりました。また、改めて一から基礎を教えてもらったことで、分かったことも多くありました。間違った認識をしていた部分や、気づいていなかった部分、分かった気になっていた部分、そして子供の実態によつては全て教えることが必ずしも良いことではないことなど気付かされることが多くありました。それは、同じく青年学校生として一緒に学んだ全国各地の先生たちと一緒に「あーでもない、こーでもない」と考えていけたことも大きな要因の一つだと思います。

文芸研で学べることは本当に多く、その分複雑で理解するのに時間がかかります。その分学び続ける価値があると思います。それはどの分野も、どの学習も同じだと思います。価値あることは、学ぶのにも時間がかかるものですし、すぐに身につく小手先の技術では子供たちに教えられないことも少ないのではないかと思います。青年学校で2年間かけてじっくりと学んだことは、これからの教師人生でも大きな支えになるのではないかと思います。また、2年間でも学びきれなかったことは、これから学び続けていきたいと思っています。

最後に、ご自身も大変お忙しい中、たくさんの方の資料を準備していただき、当日分かりやすく教えていただいた、上西先生、野澤先生をはじめ、講師を快く引き受けてくださった多くの先生方には感謝の言葉しかありません。ありがとうございました。

牛窓の香りを少しでも(4月29日)



西郷邸へ



西郷先生を知る「てれやカフェ」



西郷先生は、今も私たちの心に生きています。著作に、その見方・考え方も残してくださっています。いつでも会える。これから教えてもらえる。そんな気がします。



西郷邸には、過去の全国大会のレポートがきっちり保管されていました。西郷先生も読まれ、アドバイスを、叱咤激励もされてきた一つ一つのレポート。文芸研の財産です。今回のかごしま大会のレポートにも、その汗が受け継がれています。文学作品を読まないというおかしな授業が増えている中、今こそ文芸研が光る時です。



事務局通信

★いよいよ第54回文芸研 かごしま大会の始まりです。鹿児島での開催ということで、現地サークルでは、日程の工夫や新聞での広告、様々な手段で参加者数を動員されてきました。また、休日を使つての申し込み関係の作業も大変だったと思いますが、無事に大会が開催されます。また、厳しい状況の中での動員目標に向けた各サークルでの取り組みもありました。今回大会は、「ともだちや」をはじめたくさんのユニークな絵本を出されている内田麟太郎さん、憲法学者の木村草太さんもお呼びしての大会です。また、1年かけて作り上げてきたレポートによる分科会も魅力です。暑い夏を盛り上げるために、充実した大会に皆様の力でつくり上げていきましょう。

★新読者社より、「わらぐつの中の神様（文芸研の授業シリーズ4）」として2月に新刊として出ています。ぜひ、周りの先生にお勧めするとともに、学習会でも周知お願いします。授業に困っている先生はたくさんいます。板書に発問、また子どもの様子もわかりやすくまとめており、お勧めできる授業シリーズです。サークルでも学習に使っていただき、サークル員全員で運動を盛り上げていきましょう。また、文芸教育誌も全国のサークルのお力で編集しています。ぜひ、まずは皆さんに手に取ってみてもらい、知ってもらおうこと

から始めていきましょう。

★今年度サークル会費を未納の方は、全国大会にて納めていただくようお願いいたします。

文芸研ニュースも150号という一つの節目を過ぎ、今回原稿を書いていただいた山中吾郎先生の熱い文章から色々感じました。

私も忙しい日常の業務の合間を縫い、家事育児の関係の中で時間をやりくりし、依頼や編集・印刷作業をしています。会員の皆様に各地の健闘や個人の思いを届けられるよう踏ん張っていきますので、原稿依頼があった際には、よっぽどのことがない限り、前向きに引き受けていただけると、とても嬉しいです。

教育界の外側は、厳しい世界です。内側から火をお越し、盛り上げ、広げていきましょう。松山

☆今後の予定☆

冬の実践研（神戸）	2019年12月26日（木）・27日（金）
春の実践研（神戸）	2020年5月9日（土）・10日（日）
全国大会（山口）	2020年8月1日（土）・2日（日）

